

たのはこゝだ、一見亭の二階の八疊だ。
 たま／＼の酒の上はお互、遠慮しつこなし、くづしたまへ、
 胡座にしたまへなぞいつてゐたのが、友は見かけ程もなく二
 三盃の下りに酔つてしまつた、下りといつても實は地酒、地
 酒といつても色は茶のやうである、友は横になつて酒の香を
 吐いてゐたが、欄干に倚つて廣瀬川の秋を眺めた。
 にはかに部屋障子が明るくなる、あゝ今秋の日が暮れるの
 であつた、花やかな夕日の光が山から山へさし照して、秋の
 葉の黄ばんでゐるのは、紅くなり、紅いのは紫となつた、川
 の向岸に牛の動いてゐるのは、日暮れて牧場に歸つて行くの
 であらう、茶屋のおもてのがや／＼として、ちやら／＼馬の
 鈴音もきこえるのは、今多勢がついた様子、勘定を済まして
 階子段を下りると、庭の隅にさ／＼すの鳴く音も聞える。

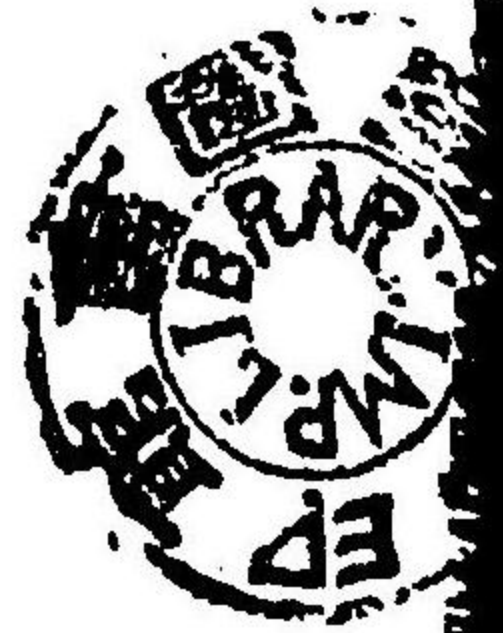
「近頃はない氣休めをしたね。」
 と道草を食ふ小供のやうにふら／＼話しながら支倉の家の前
 へくると、夕闇のおぼつかなさ、別れを告げた友の顔の巻煙
 草の光に照らされたのが見へた、おや、お歸り、東京から電
 信がまゐりましたよ、と下女のさしだすのを受取つて、どり
 いそいで開いて見た。
 ハ、ビヤウキスグコイ
 たゞ病氣とばかりで様子も知れないが、おそらくは尋常のこ
 とでなからう、なにはともあれ今夜のうちに掛すばなるま
 い、母はまめ／＼とした、肥つた、働きすきな、ささくなた
 ちで、その姿が目の前に浮ぶから、年よりの事とは言ひなが
 ら枕についたと思はれない。
 生憎池雪は寫生のために二三十里もあるところへ牧畜家と一

緒に出掛けて行つたあとであるから、遇つて留守の間のこと
を頼んでゆくせきがない。もしこの場に居たならば、どんな
にその親切な心を傷めてくれたらう、どんなにいろ／＼な手
つきをして電信の文面を想像してくれたらう、どんなに自身
の母の病氣に思合せてその動き易い眉を動かしたことだらう。
「おつかさんが御病氣だつていふぢやありませんか」といつて
自分の部屋にはいつてきたのは池雪の母親であつた。池雪の
母親といふのは、久しく肺をわずらつて、このごろはお蔭様
でそれでも大きによろしひ方ですと言つてゐるもの、瘵せ
ぎすな、つゝしみ深い、口の重ひ人で、見るもの聞くもの哀
みの種となつてゐるのだ。「ズツク」の革袋をだして、自分が手
荷物としらへてゐるところを、池雪の母親は見守つて無言
であつた。女を、ろに吾子の上を氣遣つて、二三日の留守に

も夜は殊更もの寂しい矢先、わが母の病氣と聞いたので、碌
々言葉も得言はない。
がたりと唐紙につきあつて、それを引明けたのは下女だ。
「あなた、車がまゐりました。」
雪洞をつけてあがりはな迄送りに出てきて呉れたのは池雪の
おばあさんで、外した釣らんぶを右の手にもつてきたのは池
雪の母親であつた。雪洞の蠟燭の火が虫に消されたので、格
子戸の外まで釣らんぶを差出して呉れたが、車に乗つて停車
場に向ふときは、夜風がいと身にしみた。
十二時四十分の夜汽車に乗つて、自分はいろ／＼な想像を胸
に書きながら仙臺を出發した。乗り合せた客は大抵眠つてし
まつて、革袋を枕に横になる和尙もあれば、帽子を落して知
らない商人體の男もある。自分ばかりは眠られない。腰掛に

寄りかゝつて秋の夜の夢も見ず、巻煙草を何本か燻して、白
毛布にくるまつてゐた。今更で廣瀬川のはどりに閑静な家
を借りて、池雪と一緒に世帯を持つたことを、獨り旅の身にお
もしろがつてゐたものが、にはかにあはてふためひて夜汽車
に物を思ふ身になるとは、かくもまた自分の得意のもろくも
變るものか。自分の心は玻璃の小窓に譬へて見やう、少しの
氣息を吹きかけると、山も川も曇つてしまつて残らず見ぬな
くなる。

すこし汽車のなかで寝て行かうと思へば、かへつて眼がさね
て、列車の響、汽關車の笛の音に驚かされて、かれこれする
うちに夜が明けた。がた／＼起上る客もあれば、そここゝで
よもやまの話も始まる。隣に腰かけてゐた和尚は、世を憚か
らぬ顔で、衣の裾からストツクの襠を取出して、口うつしに



がふく心を通してゐた。
東京から名古屋へ下ると、仙臺から東京へ上るとは、殆ど瀛
車の時間が同じで、表の通りならば一時頃は上野へ着くべき
だが、三十分は遅かった。「チツキ」で小荷物を受取つて車を
飛ばして本郷の姉の家へ駆けつけると、門に巡査が立つてゐ
た。
車から下りると、巡査はついで自分き避けてわきへ行つた。
あとで考へて見れば、それと察して氣を利かして呉れたので
あつた。
「お、おかへりですが、家へはいれませんか。」
と、いきなり姉に聲をかけられて、自分は不意を打たれた。
沈着をつくつて見たが、ふるくと震へて格子の外にたゝす
んでゐた。

姉の家は一週間の交通遮断。風もひいやりとするこの秋になつて、東京のこゝかしこに劇烈な虎刺拉病が流行した。ことに清潔好きな、すこやかな母が、日頃敵愾に思ひ懼れる流行病に罹つて、わづかに一晝夜の間、苦みで事畢つたとの姉の節。本所の避病院へ行けば、せめて死顔だけは見らるゝであらう。なにはともあれその手荷物をちよいと隣の大屋さんへ預けてくるがよからうと、心づけられて、自分も白毛布と「アップ」の革袋をさげて勝手口の木戸から隣へ頼みにいつた。いろ／＼世話になつた禮から、近所までも迷惑をかけて心苦しいことを細君にかたると、細君も棒を外しながら、すこし周章で、手荷物を預かつてくれた。見る人をもとに周章であるやうに思はれるのは、自分があまりの不意に驚いて、思いがけない有様に心の恒を失つたからであらう。度胸のさちらんと

きまつてゐる人でさへ、かうゆうわけで母をうしなつては、日頃の静かな心掛もひだになるためしは有るであらうを、ましてや自分のやうな輕薄な、無益しきことに驚き易いものには、この周章であまりさまはをかしい哀しい譯なのだ。びつしやり隣の木戸をしめて、立出ると、お向ふの文學士の家の女が手桶をさげてくるのに逢つた。これも、けいんな顔をして、周章てゐるやうに見えた。

子が親に別れ、僕が主人に別れ、弟子が師匠に別れる時のくゝることは、世間を見るにあたりまへな話で、めい／＼一本立になつて、やつて行く時のくるのも、ひき別れた親や、主人や、師匠の影法師のやうに消えて行く時のくるのも、自然なことだ。獅子をかぶつて舞つてゐた子が、いつしか親父ふつて笛を吹く時もくる。上下三百文と流してあるく弟子が、い

つしか紋付の羽織を着て療治に出掛ける時もある。とはいふものゝ、よもやこんな周章でた心で、自分は母に別れやうと思はなかつた。

母は十八の年に吾家へ縁付いて、一生處女のやうな快活な心であつた。いつでも人に言はれる。情の深い、涙もろいなちではあつたが、泣いたあとは直に心の空が晴れて、沈み勝な嫂を慰めて、立働くのを楽しみにしてゐた。自分の心が情の波にゆられて、鷗のやうに水に落ちる時でも、明星はどの光の身に添はない時でも、母に慰められ、勵されて、いつでも藝術を慕ふ心に立ち歸つた。

かう途々車の上で考へながら、自分は本所の避病院へ出掛けた。受付へ名刺を差出すと、やゝまばらしくして小使の案内が
つた。庭の植樹の間をぬけて、石炭酸くさい蒲團のいくつ

か乾してある側道から死亡室へ廻つて行つた。思はず足早に歩いて、室ごとに掲げてある名札を讀むと、母の名が黒塗の木札に白く書いてある。身體は残らず白の晒で巻いて、顔だけが顯れてゐた。これは誰かの間違であるまいか、それでも母とは受取れない位に面瘦がして、たい自分の心覺には左の眼の上に黒い痣のあつたので、漸く母かと思ふほど病のため容貌が變つてゐた。噫、笑ひもし泣きもしたのはきのふのことのやうに思はれるのを、なんの心仕度もする暇がなくて僅か一晝夜のうちに冷たい石となつてまゐつた。秋の日は寂しく廂の板の間からさして、蒼ざめた母の顔を照らしてゐた。最早呼んでも受答へをする口唇ではない。其夜病院の裏門から砂村の火葬場へ母のなきがらを送ることになつたので、闇を照らしてゆく提灯のあとについて、自分

は火葬場で火を入れるところまで見て歸つた。
木曾路の日記をつけたのも外ではない、母の遺骨を携へて、
父の墓のはとりへ葬むるためにうまれ故郷の空へ歸ることになつたのだ。自分は故郷を出で、から十七年目になる。頑是
ない時分に都へ上つたまゝであるから、殆ど覚えもないはど
なおぼつかない道をたどつて、久しぶりで木曾の古里にかへ
る。

十月三十一日

空飛ぶ鳥にふるさとの花の影を尋ねるまでもなく、誰もその
故郷を慕はぬといふものはなからう。殊にうら若いものゝ身
として故郷の空を慕はぬといふものはあるまい。たとへば今
日文藝にこゝろさすものゝ故郷はと問はれ、無論東京と答へ
る。東京は明治の美術の天だ。書工もこゝから出て、詩人も
こゝより生れる。たまさか旅の身の遠い海邊の潮の音に都の
空を眺めるときは、どんなに東京の風俗の慕はしく、どんな
に東京の言語の慕はしかろう。それと同じことで、信濃柿の
葉に、木曾川の水の藍色深いかなた、古里といひ故郷といふ

字の音までが、なにとなく自分の耳にはなつかしい。これから木曾路にかゝると、案内の男が提灯の光に夜道の闇を照しながら、自分の方を向いて足許に氣をつけてくれたとき、顔はないころ都に上つたまゝで地理も風俗も青波を隔てて海草をうかゞふは僅かばかり記憶のうちに残つてゐる自分の古里はどんな有様になつてゐるであらうか、幼な馴染はどんな有様に變つてゐるであらうかと、顔はないころのよるこび、かなしみが書のかやうに眼の前に浮びいで、こよひは懐かしく過し昔を思ひだしたためしはなかつた。

「提灯がすこし暗くなつたね。」

「へい、蠟燭を買つて參ればよろしうございしました。」

「石ころ澤山の山坂で、おまけに眞闇な夜道だからたまたま、おまへさんも荷物と提灯と兩方ぢややりきれない。提灯はわ

たしが持たう。」

「なにそれには及びません。」

「まあいゝから、こつらへお出しよ。」

案内の男から提灯を受取つて、「時に、何時になるだらう」と自分は兵兒帶の間から懐中時計を出して、提灯の光に透して見ると、八時過であつた。丁度中津川の村端れにさしかゝると、案内の男の注意でお忠さんといふ老婆のへ立寄つた。お忠さんはもとの中津川の生れで、久しいこと自分の郷里の馬籠へきてゐた。自分の家の隣に小島崎と屋號をつけた別家があつて、そこを借りて小間物を商つてゐた。自分の幼ないころには、このお忠さんの膝に乗つて、圍爐裏の火にあたりながら、さまゝのおさなものがたりを聞くのを樂みにしてゐたのだ。圍爐裏の清書に佳々なさゝ先生の朱字を頂い

てそれをこのお忠さんに見せるのが楽しみであつたのだ。裏の小川へ魚をすくひに行く時、手網をこしらへてくれたのも、榎の實の落ちたのを拾ひに行く時、小笹を供へて置いてくれたのも、このお忠さんだ。「ごめんなさい」と酒戸をあけて音れたとき、お忠さんはおろ／＼と老の涙にくれてゐた。幼ないときと同じやうに、ほんの六つか七つの小供のやうに自分で取扱つて、錫の小じで菓子皿の金米糖をすくひながらおてをと言はぬばかりに自分に呉れて、東京からいらしつちや御馳走も何もありませんけれど、今夜はまわゆつくり話していつて貰ひましょ」といふのを、押して辭退して、「いゝえ、さうしちやゐられない。名古屋から電報をうつて置いたから、馬籠には姉がきて待つてゐる筈」といへば、「おゝ、そんならさうなざるが、どうせ明日は馬籠でおめにかゝりませう

から」と、お忠さんは手ばしこく提灯の蠟燭を新しいのにさしかへて、氣を利かしてマツチまで添へてくれた。落合といふ村を過ぎて、自分と案内の男とは既に山坂をいくつか越してきた。二人の今歩む道は餘程の高地であるやうに感ぜられた。筆のついで、かいつまんだ地形を記して見るなら、木曾は御嶽の大山脈と駒嶽山脈との間に狭まれてゐる谷で、御嶽山脈の麓を流れてゐるのが木曾川である。木曾の村々はみなこの木曾川の流れて沿ふて連続してゐるのだ。丁度自分の古里の馬籠はこの山脈のはづれに當つてゐて、その起伏した山々が六曲峠を終として美濃の沃野に落ちてゐる。わづか中津川村より二里と聞いた道程が、山坂のせいから餘程あつた。あゝ草臥たから一と休ませうと、案内の男は道

ばたの石に腰かけて、すばく煙草をふかしてゐた。自分も
巻煙草が燻したくなつたので、火を借りると、この男が手の
掌の上へ眞赤な吸殻をのせて、ころくさせながら口をすば
めて吹いてくれた。このあたりの平らな大岩の上で、自分は
よく遊び戯れた昔のことを思ひだして、岩のはなまで行つて
見ると、暗の夜のころもどなさ、山も草木も目に見ゆる色
がない。

坂の向ふより提灯片手に喜代さんといふこの村の巾利で自分
の親戚にあたる人が、迎へにきてくれた。實は昨年の冬、こ
の馬籠に大火があつて、全村殆どその災に罹つたので、大抵
の家は假普請のまゝであるから、このたびの葬儀のためにわ
さく遠い村から出掛けてきてくれる親戚などを請すべき好
都合なところもない。廣間のあるのは焼残つた永昌寺といふ

寺ばかり。喜代さんの計らひで、この寺を借りて萬事の埒を
明けることにして、親戚もみな待ちうけてゐるとのことであ
つた。

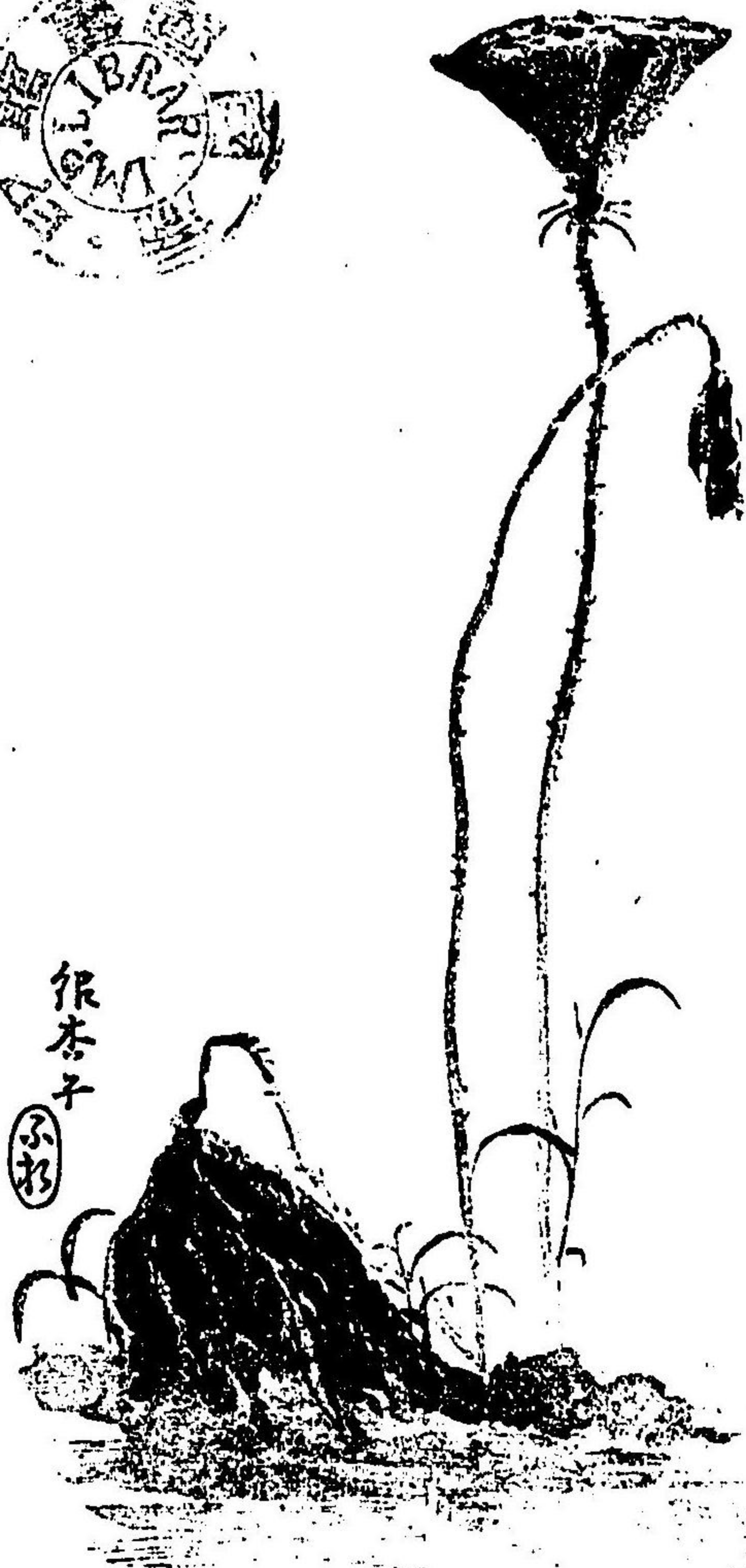
村のなかほより寺へ曲るところに、自分を待合せてゐる人
々がある。闊ながら姉の聲が自分には第一に聞えたので、思
はず足早に歩いてそこにゐた人々に挨拶すると、いろく親
切な吊辭をうけた。自分の眞身の兄はどに思つてゐる姉の夫
は、馬籠より十三里ばかりさきの福島に奇應丸といふ名高い
薬を商ふ人で、苗字を呼ぶより奇應丸といへば通りが早い。
この兄の奇應丸も姪と一緒にわさく葬儀に出掛けてきてく
れて、このたびのことは一切奇應丸の主となつた計らひであ
るのだ。自分等はずれだつて霜枯の草を踏んで永昌寺への細
道へ曲つた。

自分の姉弟のうちで、すぐれて感情の深いのはこの姉で、また感情の美しいのもこの姉である。今は故人となつた父も矢張姉と同じやうな性質を供へてゐたかほりに、やがてその情の火が烈しい性格を焼きつくして、かへつておのれの情のためには自ら苦しみ自ら病を作るほどであつたが、姉は父の性情のよきかたを享けたものと見え、その情は花やかにやわらかい。女の情には花ともならず、色をも染めず、空しい涙となつて零つるのがある。頭をなしに愚痴とけなして了ふのは、男の舌の鋭い證據になるばかりでなく、言葉も寫すことの出來ない思を胸に浮べて、やがてそれを言ひ出せば自身の耳にさへ愚痴としか聞えないのがある。男の見る夢は爛々たる火のやうだ。女の見る夢は春の夜の露にかすかなるおもひきがある。母の亡くなつたこと、久しぶりで自分と顔を合せたこ

となどで、姉は胸のうちを寫す言葉もないかのやうに、姪に助けられながら寺へ行く道々袖を濡してゐた。盥のぬるま湯に足を洗つて、永昌寺の奥の十畳へ案内された時は、自分も旅のつかれを休めるせきがなかつた。親戚舊知の人々にかはるくくやみを受けて見れば、自分の幼ないころの友達はみな立派な旦那様になつて、小學校にゐたころの女友達もみな母親になつてゐた。自分の故郷はことに縁結びをするのが早いので、娘は十五六になれば齒を染め眉を落して、それ／＼堅い夫に縁付いてゐる。わが古里とは言ひながら、自分は殆ど幼な馴染の人々の俤をも記憶しない位であつた。寺はことさら静かなこよひ、大火鉢の灰をかきならして、さまざまの物語をした。この夜は一同で永昌寺の廣間に泊る。

十一月一日

風雅でもなく洒落でもなく、きのふのやうに思ひのまゝを記して見れば、ありのまゝなことを記すは筆に勿體がつくやうに思はれる。おそらくはいかに考への深い人でも依怙な沙汰のないものは世間になからう。他人の身の上でも記すやうに、なんの矛盾もなく、過失もなく、すら／＼と我身の上を書き流すことが出来るであらうか。そのむかしみちのくの旅に風雅のさびしさを尋ねて、古人も多く旅に死すと奥の細道を記した俳士の上などには、矛盾らしいこと、滑稽らしいこと、過失らしいことを演じたためにはないのであらうか。自分の日記を作るに何のつゝみかくしがいるう。凡夫のあさましさ、我身の上はそんな立派な、無疵なものぢやない。依怙な



根茶子

ふち

われぼめな、矛盾なさまを寫さねば自分の日記にはならないのだ。いつそありのまゝな矛盾でやれ。

海邊に生れた人を自分は羨ましく思ふ。慾には青々とした海のはどりに生れて、母の乳房にすがるころより耳に潮の音を聞く身になつて見たい。よし身はいやしい漁夫の家に生れて、色は潮のためは落栗の皮のやうに見ゆるにもせも、朝は朝の聲を聞き夕べは夕べの色を見て、胸は海の汐に染み、心は波の岩に碎けて、まことに自然の聲を味ふ身となつて見たい。

葬儀の仕度をしてゐるうちに、小人多忙にして反つてこんなことを思ひ起した。あらましの用意も整ひ、かねての通知もあつたことゆへ、わさゝ、遠い村より會葬に集つた人々も見ゆる。中津川のお忠さんも來た。家例によれば神葬式で、今度母を葬るについては全村の火災後葬儀をすべき場所もない。

ので、餘儀なく寺を借りて式を行ふことにした。彼是してゐるうちに禰宜も見ゆる。この禰宜は自分と一緒に小學校へ通つた幼な馴染で、この寺の住職も矢張いたづらをして遊んだ仲間である。あまりおかしいので、姉は泣くあとから笑ひこゝろげて、いそがしく立働いてゐた。

すこしの間、客を避けて、自分は障子をわけて縁へ出た。姪は欄干によりかゝつて、獨りで庭の菊の花を見てゐる。鼠縮緬の晴衣に小紋の下着を重ね、一つ紋は花菱、髪のはすがたも都の風をうつして、葬儀の式にゆく用意を整へてゐた。菊は住職の丹精で、かゝる山家にめづらしいはどの色を見せ、日の光は本堂の屋根の影を花鳥のうへにうつしてゐた。

午後一時ごろより式が始まつた。禰宜は濃紫の直衣に古風な烏帽子をかぶつて、ぼん／＼と拍手をうちはじめた。思ふに

葬儀で簡單なのは神葬式、次には耶蘇式、すくれて儀式の盛なのは佛葬である。神葬式には耶蘇式のやうに哀歌を唱へることもなく、佛式はどの讀經をするでもない。靈柩の供物は平常身を養ふべきものゝかす／＼、常盤樹の葉に白紙を切りさげて、なにとなく古代の風を目の前に見る心地がする。第一、禮拜のさまが最も古風で、質樸である。次に吊辭の文が嚴めしい古典の型に随つてゐるから、他界のことや宗教的なおもひを起させることの少ない割合に、いとゞいがめしき質樸に聞ゆる。この時に禰宜が清しい聲で讀みあげた文章は餘程苦心を凝して作つたものであつて、姉や姪などはひた泣きに泣きむせんでゐた。母の遺骨はこの永昌寺の境内で、父の墓の側へ埋めた。墓地はすこし小高いところにあつて、杉の樹の蔭から馬籠の家々

の屋根が見ゆる。境内にはどころまんだら笹龍膽の花がさい
てゐて、野菊の萎れてゐるさまもあはれであつた。

きみがはかばに

きいくあり

きみがはかばに

さかきあり

くさはにつゆは

しげくして

おもからずやは

そのしるし

いのかねむりを

さめいで

いつかへりこむ

わがはよ

あからひくこも

ますらをも

みなちりひおど

なるものを

あゝさめたをふ

ことなかれ

あゝかへりくる

ことなかれ

はるははなさき

はなちりて

きみのほかばに

かゝるども

なつはみだるゝ

ほたるひの

きみのほかばに

とべるども

あきはさみしき

あきさめの

きみのほかばに

そゝぐども

ふゆはましろに

ゆきじもの

きみのほかばに

こほるども

とほさねむりの

ゆめまくら

おそろゝなかれ

わがはゝよ

十一月二日

きのふの勢れに奇應丸も姉も横になつて、懐舊の物語を始め
てゐたが、自分は寺のうちをそこゝと歩いて、古風な建築
のさま、佛壇の裝飾、威嚴ある木像の彫刻などを見て、素人
考にいろゝと寺院の建築などのうつりかはりを考へて見た
やがて獨りで村のさまを見に出た。
京の着仆れ、大阪の食仆れとは、俗にも一口に言ふことであ
るが、總じて京大阪にかぎらず、衣服食物の上に心を注ぐは
と深くは家屋建築などに注意しない。今日の風俗として、身
の結ひ様、帽子の形、煙草入、下駄などには常に流行の好め

があつて、随つて意匠もめづらしく趣味も進んで行くやうに
思はれるが、家屋建築の上にはそれはその流行もなく、好み
といふものも少ない。つゞきは水都合のよしあし、買物の便
不便、建方たてかたなんぞよりは一間でも廣い方が割だといふところ
に落ちる。今日の趣味は、室内の莊飾、床の間の置物などに
傾いて、反つて家屋の構成、屋根の形、窓の姿、柱の位置な
どには深く心をとやめない。普通の家屋は大抵簡單な直線の
式で、まゝの線を用ゐるところは實に稀だ。自分の古
里のやうな山家でもこの趣味が感化を及ぼしてゐる。
家屋のさまといひ、生活の姿といひ、山家には畫中の趣があ
るので、住む人にもまた景色のやうな無心なものと思ふのは、
日暮れて宿を急ぐ旅人がはんの素通の手帳に記してあること
だ。こゝまかに觀察してみれば、山家の生涯とてそんな無心な

景色のやうなものではない。見かけは書中の材にとられて、草木のなかに寫されるほゞな人々も、裏には煩惱、愛着、闘争の世界を作つてゐる。とはいふものゝ、さすがに山家は山家だ。都ならば戸締を堅くして、鑊をかけて、しんばりをかつて、すこし小金でも溜めてゐる人は鼠の音にも刎起きて見廻るほゞ用心を深くする。そこへ行くと山家は狭い。善につけ悪につけ、すべてのことが直に知れる、直に知れるから小盗はあつても大盗なしといふ有様で、夏は多く戸を締めないで寝る。筆のついでに、このあたりの若い人々の上を記して置かう。夕暮からかけて夜は若いものゝ世界になつてゐるのだ。農家のものは朝早く一家こぞつて島に出て、日の光に顔を照されながら、一日汗びつしよりに立働く。大人ならば、麥を背負ひ、馬を引ひて歸つてきて、鋤、鎌も洗ひ、足もす

すいで、熱燗の濁酒に酔がまわれれば勞れも忘れてころりと横になる。若いものはそれでは承知しない。なんでも遊ばずにはゐられない。馬士唄の稽古も、祭の相談も、それから始まる。夕暮から娘も手ばしくおしまひをして、新しい前掛の一枚もかけかへて、ちら／＼わかりのつくころには遊びに出る。秋の夜を長いものとは、圍爐裏の側でやる白挽歌の心意氣になつてゐるのだ。

自分はそのこゝとあるいて、火災後の俄普請のさまなどを眺めてゐたが、ひきかへそうすると、島にゐた二三人の小供がめづらしそうに自分の方を指して、笑つてゐた。この日は一同で墓参りをした。午後三時ごろ自分等はそれそれ會葬の禮や又た暇乞をして馬籠を立つた。妻籠には自分の年老いた叔父があるので、こよひは一同妻籠泊りとさめて、

二里の山道をぼつ／＼歩いて行つた。姉や姪などの女連がある
るので、道がはかどらない。始めのうちには快活な話をして、
めい／＼我を忘れて歩いてゐたが、次第に足が勞れる、話が
なくなる。竟には互に無言で巻煙草ばかり燻かして行くやう
になつた。

暮れかゝつたので、奇應丸も姉も姪もみなすん／＼先へ行つ
て、自分ばかり取のこされた。まゝよ、ゆる／＼木曾川へ注
ぐ流に添ふて、蕭條とした夕暮のさまを見て靜かに妻籠へ下
つた。

日もどつぷり暮れて叔父の家へ着いた。「お、来たか、来た
か」と叔父はほく／＼喜んで、「さぞ寒かつたろう、あんまり
遅いもんだから、いま人を見せにやつたよ。まわ圍爐裏の火
にでもあたれ。いや火燧の方がいゝかな。お風呂も沸いてる

が先へ入るか」といゝろ／＼自分をもてなしてくれた。「今夜は
ゆつくり話してくれよ、飲んでくれよ、何かおまへの好きなも
のを御馳走しよう、好きなものといつたつて、こうした山家で
はなんにも珍らしいものはないが、おまへのちいさい時分に
は木曾名物の御幣餅がすきだつて、御幣餅がよからう。小鳥
の買つたのがあるから、あれも焼いて食はせたい。あゝ年が
寄るところ氣がせか／＼するから困る。時にこの柿はどうだ
な。」

十一月三日

持統天皇のころ木曾街道を開くとある、その街道のことなど
は古くて尋ねるすべもないが、権の花のこゝろを尋ねて一笠
一笠のわび姿で蕪門の詩人たちが通つたといふ道も、今は島

となつて、道路も幾度か改まつてゐる。木曾路といつても、この妻籠からはなかく、よい道で、工事のよく行届いてゐる。具合は美濃路も及ばぬ程である。けふは晝前に義理を済ましてしまひたいと、自分はこの妻籠の親戚へ會葬のときの禮廻りに立寄つた。天長節の祝ひで軒どとに日の丸の旗が出してゐる。寒さうな顔をして、豆絞の手拭に頬冠りをしながら、馬を牽いて行く群も見ゆる。日あたりよいよところへ藁席を敷いて、豆を乾してゐる婆さんの側に、厚ぼつたい半天を着た年寄が、日の光に背を曝して昔を夢に見てゐた。紫になつた信濃柿や、小鳥のきて鳴く雑木の影には、梭の音もきこゆる。

午後一時過に奇應丸夫婦と姪と自分の四人が妻籠を立つた。叔父は村はづれまで見送つてくれた。叔母は五六人の親戚と

一緒に牛が淵まで送りにきてくれた。こゝに吾妻橋といふのがあつて、この新しい橋の畔に休茶屋がある。一同はこの茶屋で一と休みして、さてこゝで互に別れの言葉をのべた。姉は自分の側へ寄添ふて、寒さうに震へて、なにか思ひ出して泪ぐんでゐた。女心にそれからそれへと氣を配つて、母のことと思ひ出す暇もすくなかつたのが、埋葬もすみ、叔母にも別れて、橋のたもとに名残を惜まれて見れば、にはかにさみしいこゝろになつて、ばらばらと落ちる枯葉のさまを眺めてゐた。自分は一人乗を一臺雇つて、こよひの宿を定めて置いて、姉と姪とを先へ出發させた。奇應丸は糸織の羽織に紺の絹股引をはいて、茶の山高をかぶつて、軽々とした身仕度であつた。これからは話も二人の話で、奥も二人の奥で、新しい草鞋の穿心地もよ。

牛が淵といふのは木曾の名所の一つだ。断崖に上つて眺めると、大河滔々と流れて、藍のやうな青々とした河波がこの淵に巴のやうな絞を畫いてゐる。木曾川のながめの美しひのは染めたやうな青い河波と、白い大岩とが互に亂れ合つてゐるところにある。河の石はみな花崗岩で、水のあたるところは殊に純白な珠のやうだ。よしやいかにすぐれたる大才があつて、高邁な力を振つて自然の姿を大理石に彫り刻むとしても、この河波とこの大岩と青色白色相交つてゐるさまを見たならば、おそろくは彫刻の刀を捨て、自然の飛動してゐるのに驚くことであらう。

秋も暮れて、山々はさびしくなつた。自分等は河に添ふて、谷へ下り、坂を上り、いくつか小山の道を越へて、高いところから眺めると、紅葉のさまのうつくしさ、大海の波のやう

な山々は前へ落ち後へ延びて、右は黄、左は緑、手近いところは紅の色を染め、日の光のあざやかに深紫の雲間をもる、ありさま、あゝ、實に深い自然の畫である。こゝに至つては人間のする事業がこの深大な天然にひき比べられやうか。さまざまな名目をつけて自分等にすることも、こうした深い自然の前に比べて見れば、ほんの小供の戯れのやうな心地がする。日頃色彩の大觀を慕つてゐる友人の畫工などに、この美しい景色を一目でも見せたい。日頃せちがらい世渡りにうら若い心をなやまして、讀書に神經を刺激して、おもしろくないで暮してゐる友人などに、この自然のさまを見せたなら、どんなに我を忘れて不平な胸を和げることだらう。三留野を過ぎて、假名千谷といふところへきた。あんなり景色がいゝぢやないか。どうだね、こゝらで一服やつては、よ

「かるう」と自分等は紅葉のちりかゝつた白い大石に腰をかけた。これまで見てきた木曾川のはどりで、この假名千谷はど静かな眺めはない。奇應丸も自分も微笑で、時のうつるのも忘れるばかりであつた。
「いつまでかうしても居られまい」とこの假名千谷を後に見捨て、快活な話しに興じながら道をひるつた。行く／＼自分はその静かな眺めが目について、緑の常盤木のかげを通ふ渡し舟のさま、梶染のやうな山の端の黄葉などが、晝のやうに心のうちに浮んで、身につきまどふ影のやうに離れがたい心地がした。

假名千谷を出て羅天へくると、彼の趣は深く、是の眺めは奇だ。自分等の歩むところは殆ど楓ばかりで、風に吹かれてひら／＼と落ちる紅葉が帽子の上や羽織の袖にちりかゝつてや

がて木曾川の流れに浮いて行く。ふと目の前に古い夏帽子が落ちてゐた。自分はこの古帽子を川へ投げ捨てると、生憎崖のなかほほどの紅葉の枝に懸つた。奇應丸もいゝ年をして、自分と一緒にいたづら盛りの小兒のやうになつて、この古帽子へ小石を投げた。自分の石はどうしても當らない。奇應丸はまた丸い小石を拾つて、ひよいと投げると、古帽子は紅葉と一緒に木曾川へ落ちた。

奇應丸はこの勝利に高慢らしい風を粧つて、二人で大笑ひをしながら、壺天庵の月、與河の秋、柿園村の柿などの噂ををして、木曾川のはどりに添ふて行くうちに、早やけふも暮れる。野尻の宿へつくまへに駒が嶽にうつる美しい夕照を見た。この夕照の色は純粹な紫で、木曾通な奇應丸の説には駒が嶽にある紅葉へうつる夕日の色が、遠くあの美しい彩を見せる

のであらうと言つた。ことにあたりの高山が皆な暗黙として
ゐるなかに、獨り駒が嶽が桔梗の花の色のやうで、どこやら
透明な光を帯んで、静かな空にかゝやいてゐるさまは、殆ん
ど書かと思はれた。いつぞや箱根の湖水にうつる富士を見た
ことがある。それがやはりこの紫であつた。自然の色のうち
でも、黄とか緑とか言ふ色は、到るところに見られる。生粋
な紫の色は自然の惜んで藏してあるものだ。容易には人間の
目に觸れない。

こよひの宿は野尻の旅屋宿の奥の二間で、姉と母とは自分等
を待つてゐた。こよひはと氣がねもなく、遠慮もなく、一つ
の炬燵を四方から取圍んで、楽しい話をしたことはなかつた。
「お風呂が湧きましたからお流しになりませんか」とのことので、
かはるゝ出ていつたあと、自分は炬燵に頭をつけて、けふ

の自然のさまを心のうちに浮べてみた。假名千谷のわけぼの、
羅天の夕ぐれ、自分に自然を寫すの筆があつたなら、この目
記もかうした無趣味なものではあるまい。世間に羨ましいと
思ふことも多いなかに、自然の趣を捕へてそのまことの姿を
寫す美術家の力はと羨ましく慕はしいものはあるまい。文に
も詩にもそれゝの流義があるやうに、自然にもまた流義が
ある。狭いと思へば廣く、浅いと思へば深く、静かなと思へ
ば動いてゐる。うつろふと見ればとゞまつてゐる。あゝこの
無盡藏な自然を寫すことが出来やうか。美術家の自然を寫す
のは、たとへば手をのばして泉を掬ふやうなものであるう。
日元までもつてくるうちに、七分通は指の間から滲らしてま
まう。

十一月四日

ゆふべは些細な興に乗つて思はず理に落ちた。けさ八時ごろに姉と姪とは車を雇つて先へ出掛けた。九段が淵を過ぎ、小野の瀧を見て、滑川橋を渡るころは時雨になるかと思はれた空合も、晴れて寢覺へついた。寢覺は浦島の古事をかりて、岩のはどりのながめ深く静かなところに、浦島の釣を垂れたといふ床もある。臨川寺の辨天堂には浦島の釣竿といふのがある。そのはどりに姿見の池もあつて、奇を好む旅人の必ず立寄る名所となつてゐる。この寺の門前に一人の僧が聲を擧げて、手には帳面を持ち、筆をくわえて、いそがしく罵りさわいでゐると、五六人の百姓が汗を流して米俵を持ち運んでゐた。門を入つて案内を頼むと、にしめた

やうな衣を着て、おもさじもうつくしく、十歳ばかりと思はれるのが干柿を釣るしてゐたが、年上なのに叱れて、まふしよ自分等の案内をしてくれた。この龍宮の入口にも秋は暮れて、垣根に残つてゐる黄菊の花もあはれであつた。上松あたりから木曾川には白の花崗岩と薄黒い安山岩とがいらまざつて、河を上れば上るほど花崗岩はすくなくなる。この邊に多い皂莢樹の蔭に腰かけて、通る人を眺めながら笑つてゐる糸ひきの工女もあつた。夏は河鹿なくといふ流れのはどりと、馬士が勇ましく歌をうたつてくるのもあつた。假名千谷の趣も、羅天の眺めも、その風情を合せて變化を盡してゐるのは棧橋であらう。丁度道路の修繕で石を割る音がおそろしく響き渡つて、そのために休茶屋までがどろこわしてあつた。五六人の工夫が落葉をくべて、火をたいてゐるは

12/33

どりや。大な割石の間をぬけて、小高いところから見下すと
 日の光がこのさびしい路谷にさしてらして、木曾川のほとり
 は皆な紅葉であつた。自分等は紅葉の影の深いところへ入つ
 たり、また日の光の花やかにさすところへ出て、影にかくれ
 光を浴び、自然の色彩の美はしいのに眼もさばゆいほどであ
 つた。
 思はず自分等は時を費してゐたが、これから度つくと歩い
 て、福島奇應丸の家まで着くには餘程みちのりがあるやう
 に思はれた。合士といふところ、木曾王瀧の二つの川の流
 れ合ふさまを見て、夕暮の空にかゝやく明星にさそはれて福
 島へ入つた。

一葉舟畢

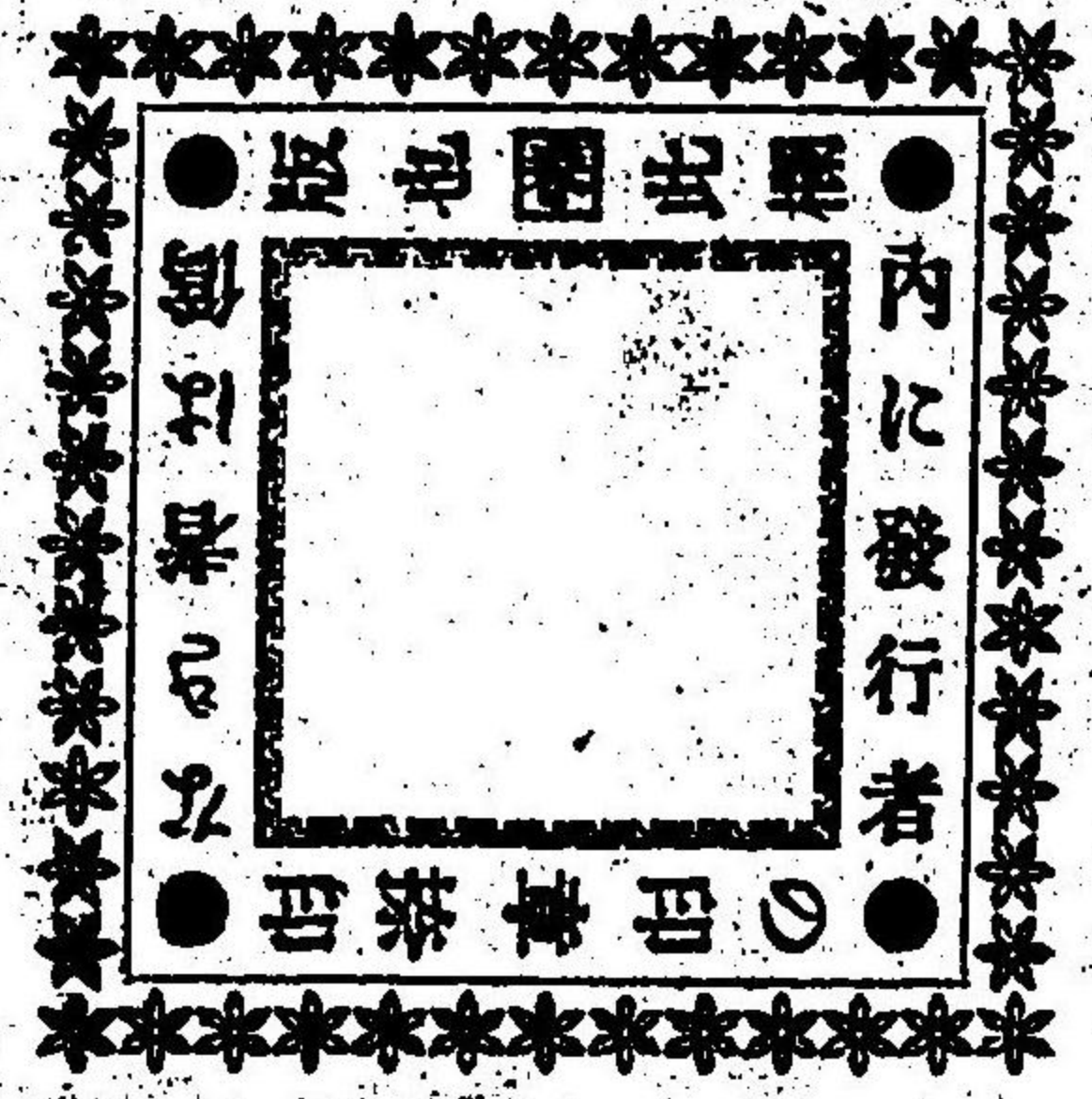
明治三十一年六月十二日印刷

明治三十一年六月十五日發行

一葉舟與付

實價金三拾五錢

版權所有



著者 島崎春樹

發行者 和田篤太郎

印刷者 根岸高光

發行所 春陽堂

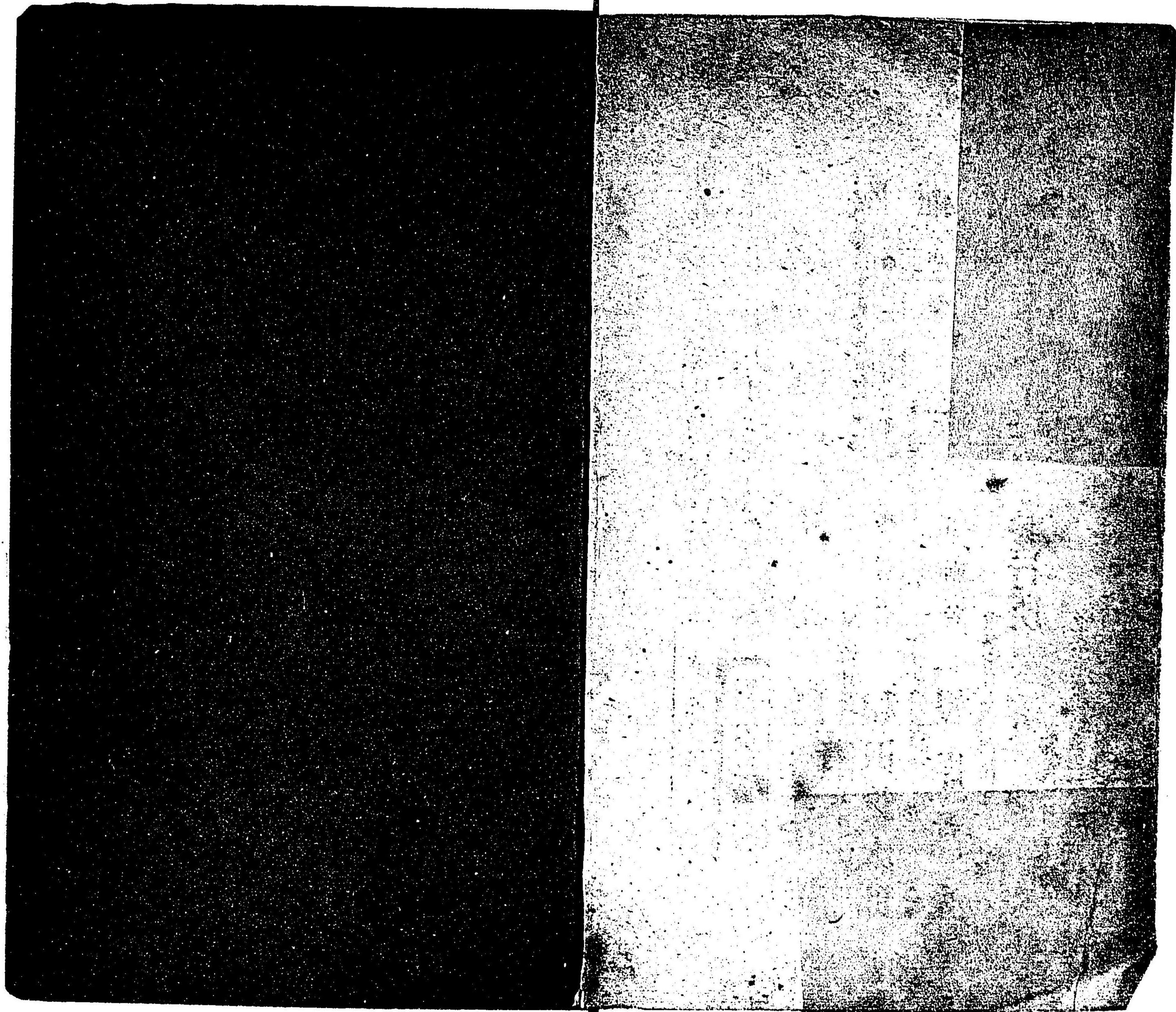
印刷所 帝國印刷株式會社

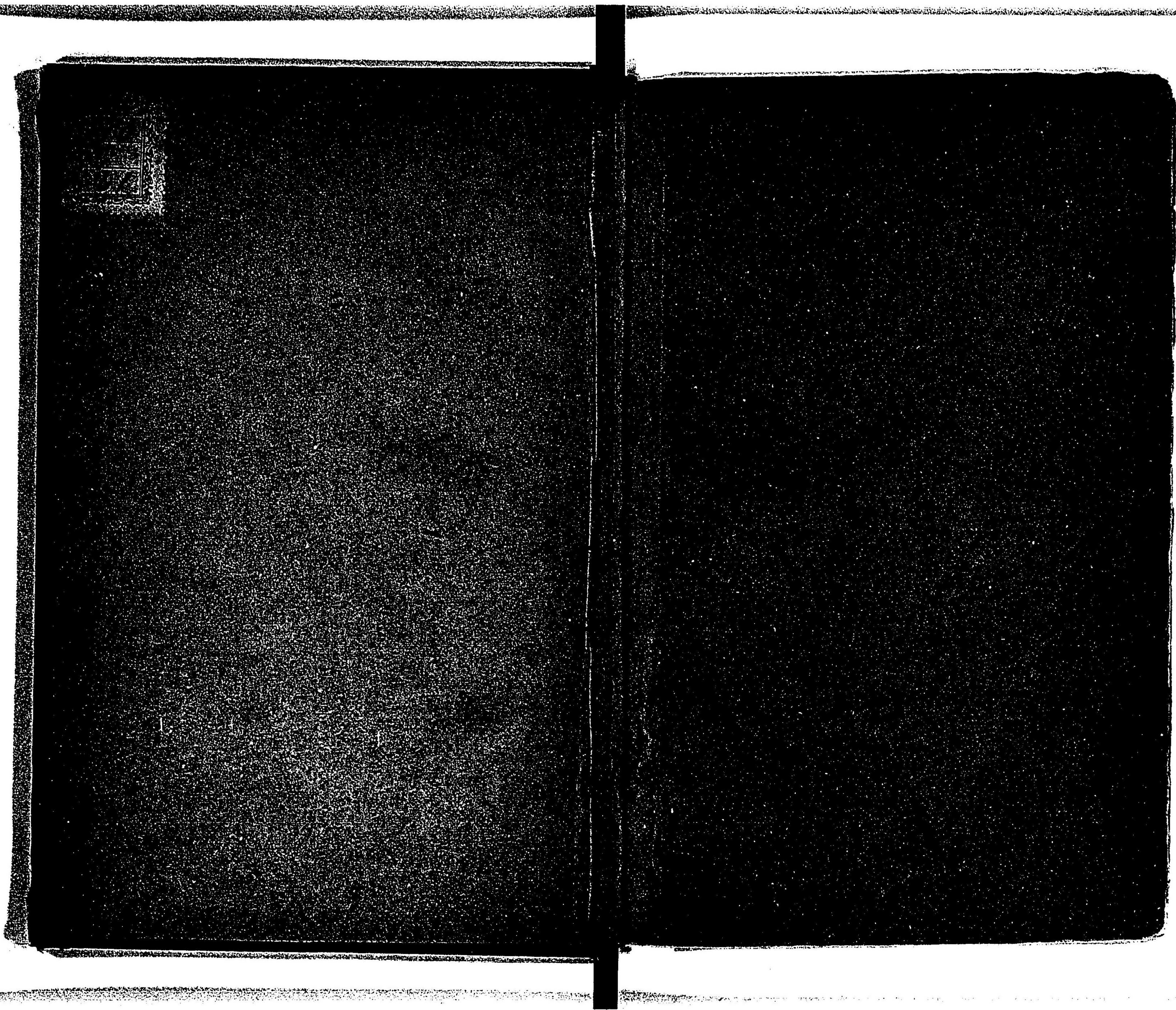
（電話花子〇七十九番）

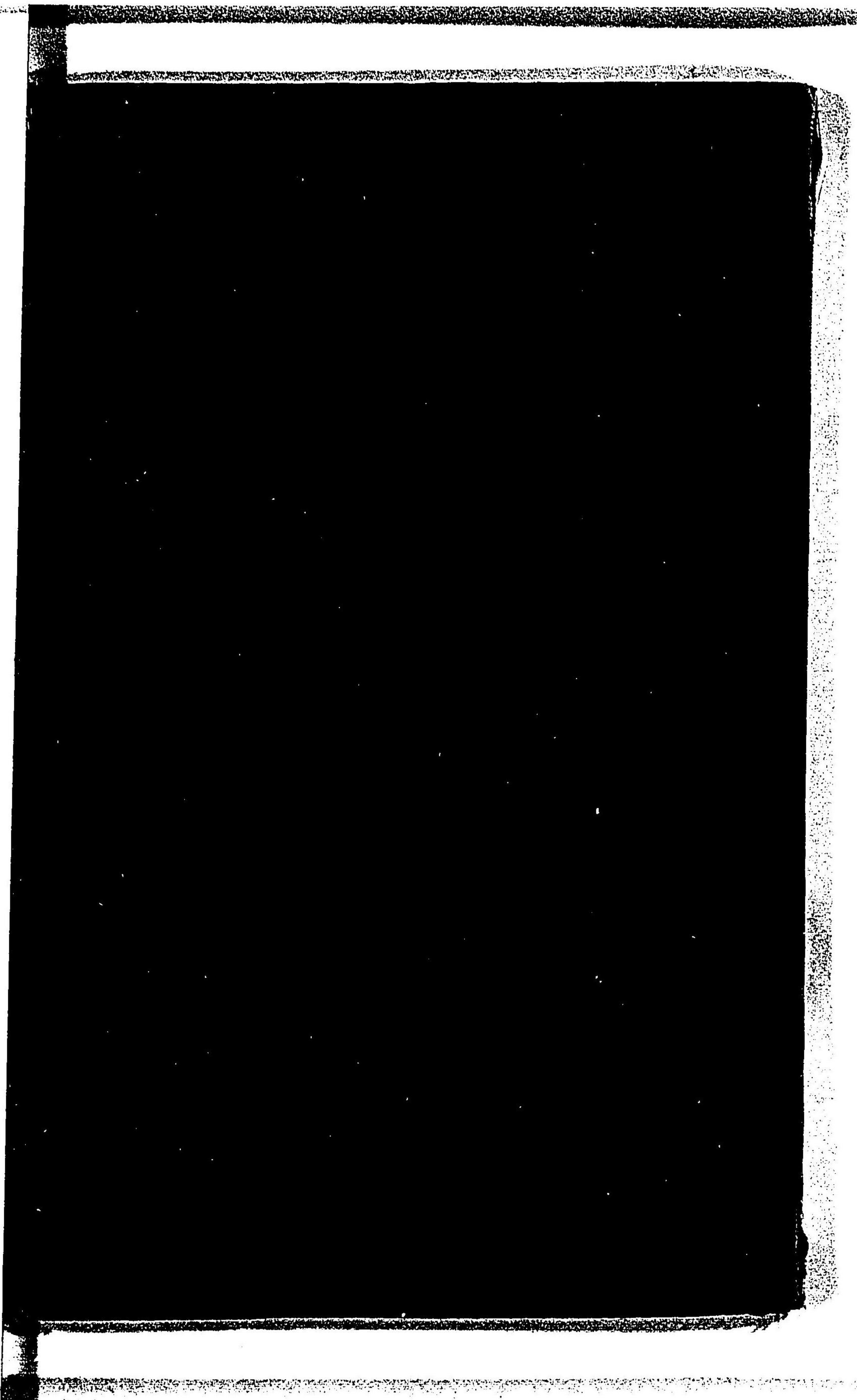
東京市京橋區築地三丁目十五番地

東京市日本橋區通四丁目五番地

（電話本局 五十一番）







61

088096-000-0

80-61

一葉舟

島崎 藤村/著

M31

DBG-0193



